

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
(例) 夜寒《よさむ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号  
(例) 唯|此处《ここ》は

夜寒《よさむ》の細い往来《わうらい》を爪先上《つまさきあが》りに上《あが》つて行《ゆ》くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電灯がともつてゐるが、柱に掲げた標札の如きは、殆《ほとん》ど有無《うむ》さへも判然しない。門をくぐると砂利《じやり》が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々《ふんぶん》として乱れてゐる。

砂利と落葉とを踏んで玄関へ来ると、これも亦《また》古ぼけた格子戸《かうしど》の外《ほか》は、壁と云はず壁板《したみ》と云はず、悉《ことごと》く蔦《つた》に蔽はれてゐる。だから案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴《ベル》の鈕《ボタン》を探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴《ベル》を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髪《そくはつ》に結《ゆ》つた女中が一人《ひとり》、すぐに格子戸の掛け金を外《はづ》してくれる。玄関の東側には廊下があり、その廊下の欄干《らんかん》の外には、冬を知らない木賊《とくさ》の色が一面に庭を埋《うづ》めてゐるが、客間の硝子《ガラス》戸を洩れる電灯の光も、今は其処《そこ》までは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向うの軒先《のきさき》に吊した風鐸《ふうたく》の影も、反《かへ》つて濃くなつた宵闇《よひやみ》の中に隠されてゐる位である。

硝子戸から客間を覗《のぞ》いて見ると、雨漏《あまも》りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井《てんじょう》に斑々《はんぱん》とまだ残つてゐる。が、十畳の座敷には、赤い五羽鶴《ごはづる》の毯《たん》が敷いてあるから、畳の古びだけは分明《ぶんみやん》ではない。この客間の西側（玄関寄り）には、更紗《さらさ》の唐紙《からかみ》が二枚あつて、その一枚の上に古色《こしよく》を帯びた壁懸けが一つ下つてゐる。麻の地に黄色に百合《ゆり》のやうな花を繡《ぬひと》つたのは、津田青楓《つだせいふう》氏か何かの図案らしい。この唐紙の左右の壁際《かべぎは》には、余り上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎつしり洋書が詰まつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景《さつぷうけい》な鉄格子《てつがうし》の西洋窓の前に大きな紫檀《したん》の机を据ゑて、その上に硯《すずり》や筆立てが、紙絹《しけん》の類や法帖《ほふでふ》と一しよに、存外行儀よく並べてある。その窓を剩《あま》した南側の壁と向うの北側の壁とには、殆《ほとん》ど軸の挂《か》かつてゐなかつた事がない。蔵沢《ぞうたく》の墨竹《ぼくちく》が黄興《くわうこう》の「文章千古事《ぶんしやうせんこのこと》」と挨拶をしてゐる事もある。木庵《もくあん》の「花開万国春《はなひらくばんこくのはる》」が呉昌蹟《ごしやうせき》の木蓮《もくれん》と鉢合《はちあわ》せをしてゐる事もある。が、客間を飾つてゐる書画は独りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎《やすゐそうたらう》の油絵の風景画が、東側の壁には斎藤与里《さいとうより》氏の油絵の艸花《くさばな》が、さうして又北側の壁には明月禅師《めいげつぜんじ》の無絃琴《むげんきん》と云ふ艸書《さうしよ》の横物《よこもの》が、いづれも額《がく》になつて挂《か》かつてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶《どうへい》に梅もどきが、或は青磁《せいじ》に菊の花がその時々で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間《ま》へ転じなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙《からかみ》も何もないのだから、実は一つ座敷も同じ事である。唯|此处《ここ》は板敷で、中央に拵げた方一間《はういつけん》あまりの古絨毯《ふるじゆうたん》の外《ほか》には、一枚の畳も敷いてはない。さうして東と北の二方《にほう》の壁には、新古和漢洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床《ゆか》の上へ積んである数《かず》も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法帖《ほふでふ》だの画集だのが雑然と堆《うづたか》く盛《も》り上つてゐる。だから中央に敷いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、派手《はで》なるべき赤い色が僅《わづか》ばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には小さい紫檀《したん》の机があつて、その又机の向うには座蒲団が二枚重ねてある。銅印《どういん》が一つ、石印《せきいん》が二《ふた》つ三《み》つ、ペン皿に代へた竹の茶箕《ちやき》、その中の万年筆、それから玉《ぎよく》の文鎮《ぶんちん》を置いた一綴りの原稿用紙。机の上にはこの外《ほか》に老眼鏡《ろうがんきやう》が載せてある事も珍しくない。その真上《まうえ》には電灯が煌々《くわうくわう》と光を放つてゐる。傍《かたはら》には瀬戸火鉢《せ

とひばち》の鉄瓶が虫の啼くやうに沸《たぎ》つてゐる。もし夜寒《よさむ》が甚しければ、少し離れた瓦斯煖炉《ガスだんろ》にも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机の後《うしろ》、二枚重ねた座蒲団の上には、何処《どこ》か獅子《しし》を想はせる、脊の低い半白《はんぱく》の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本《たうほん》の詩集を翻《ひるがえ》したりしながら、端然《たんぜん》と独り坐つてゐる。……

漱石山房《そうせきさんぼう》の秋の夜《よ》は、かう云ふ蕭條《せうでう》たるものであつた。

底本：「芥川龍之介作品集第三巻」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

底本の「軒光《のきさき》」「殆《ほと》ど」「翻《ひるが》したり」はそれぞれ、「軒先《のきさき》」「殆《ほとん》ど」「翻《ひるがえ》したり」にあらためました。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月26日公開

2003年10月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。